



Title	ロマンス諸語の多様性と均等性について : 特にルー マニア語とスペイン語に関して
Author(s)	伊藤, 太吾
Citation	大阪外国語大学学報. 1975, 33, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80537
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ロマンス諸語の多様性と均等性について

——特にルーマニア語とスペイン語に関して——

伊 藤 太 吾

Sobre la variedad y la unicidad de las lenguas románicas

—— el rumano y el español en especial ——

TAIGO Ito

Matteo Bartoli dice que como España y Dacia son áreas laterales (o periféricas) en comparación con Italia y Galia, áreas centrales, las dos primeras se caracterizan por la conservación de un importante número de hechos latinos que en las dos últimas se han perdido, siendo remplazado por otro, cuya aparición data en la mayor parte de los casos desde la época latina. Esto quiere decir que el español y el rumano representan, en el cuadro de la Romania, áreas arcaicas y conservadoras. Para examinar si es verdad lo que dice el lingüista italiano, aquí se han puesto los importantes fenómenos fonológicos de ambos idiomas. Resulta que, al revés de lo que opina el filólogo italiano, el español es medio conservador y el rumano, a su vez, es medio innovador comparado con el español. Con el resultado obtenido arriba como base, se ha puesto en claro la razón por que hay variedad y unicidad entre las lenguas romances.

Hay dos causas principales respecto a la variedad: la densidad de romanización y los superestratos diferentes. Se admite también dos grandes razones acerca de la unicidad: el cristianismo que es un poderoso factor convergente, y los elementos invariables de la lengua latina.

Por lo menos, estos cuatro grandes factores intervienen en determinar el aspecto que presentan las lenguas románicas.

同じラテン語から派生し乍ら、今日多様性がなぜ存在するのかという事と、あるいは矛盾するかも知れないが、均等性がなぜ存在するのかという二つの事柄がどうもふしぎに思えてならない。本稿では特に、帝国の西の端の言語であるスペイン語と、東の端の言語であるルーマニア語とを比較し乍ら、多様性と均等性の原因を考えてみたい。従来、多様性を説明するのに、基層語の相

異を根拠にしたり、ローマ化の年代の差を寄りどころにしたり、加層語・上層語の違いを援用したり、あるいは、類推・同化・異化などの新しい概念が生み出されたりした。又ドイツの青年文法学派の主張する音韻変化に例外なしとする説に對蹠するものとして、フランスでは Gillieronらの言語地理学が現れたり、スペインでは、M. Pidal が単語にはそれぞれの生命があるといって歴史実証主義をつらぬいたし、Wartburg¹⁾ は特にゲルマン的要素がロマンス諸語に大きな影響を与えていると主張したり、諸説粉々としている。印欧諸語の發展伝播に関しては、A. Schleicher が1866年に Stammbaumtheorie (系統樹理論) を提唱して以来、J. Schmidt が Wellentheorie (波状理論) を出し、A. Meillet が Hypothèse Periphérique (周囲仮説) をとなえるなど、多くの説が出ている。わが国でも、柳田国男の方言周囲論以来、周囲論は語彙だけに限って認められるべきものとして、音韻や語法に関しては方言孤立変遷論を金田一春彦がとなえたり、小林好日が社会的規範説を主張したり、榎垣実が文化降流説並びに語感連滅説となえるなど、実に多くの説が出されてはいるのであるが、一つの説明理論で完全なものは今までにないと言える。それ程に言語の歴史的変化は複雑であったという事である。

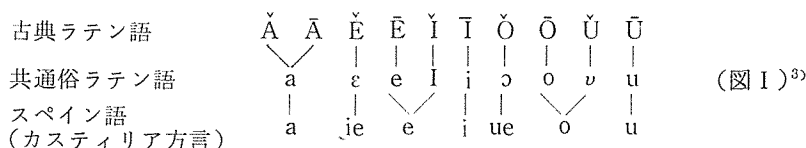
均等性については筆者は特別な説明理論を知らない。多分、同一のラテン説から派生した言語同士であるから当然であるとか、長い間指導的役割を果して来たローマの強い文化的統一力に寄るとか、特にキリスト教という中世の精神的統一力に寄るとかの大きな理由があげられるのではないだろうか。

音韻・形態・語彙・統辞の全てにわたって均等に考察する事は紙幅の都合でできないし、音韻が言語の根本的要素であるから、拙論では、ルーマニア語とスペイン語の音韻に関して、類似点及び差異を前半で示し、後半でそれらの類似点及び差異がどうして現れるかという理由を明らかにしたい。実は、筆者が拙論を書く気になったのは、Iorgu Iordan の Dos estudios de lingüística románica²⁾ に収録されている El Rumano y el Español, áreas laterales de la latinidad という論文を読んだからで、Iorgu Iordan はその中で、Matteo Bartoli のルーマニア語とスペイン語は、イタリア語やフランス語が Romania における中心点言語であるのに対して、周辺の言語であり、共に保守的であるという説を論駁しているが、筆者も両言語が共に保守的であるとは思わないし、同時に、Iorgu Iordan の論駁があいまいなので、敢えて筆をとったのである。Bartoli はルーマニア語とスペイン語の比較を語彙の面でしたのであるが、そもそもそこに欠点がある様に思われる。語彙が同系言語間でなくても一致するものが多いのは、極めて容易に借用されるからであり、しかも時が進み知識が平均化するに従ってその程度は増すからである。例えば、日本語とスペイン語に入ったフランス語のファッション用語が似ているから日本語とスペイン語は似ているという素人の言に等しい。それに、語彙の後世の借用は主に cultismo によるものであり、言語史を云々する場合、音韻面でも cultismo は自然な変遷をした結果でないから、扱わない方が良いのである。だから筆者は拙論では言語の自然な変化の研究という意味から、popularismo の音韻変化を扱っている。ところで、Iorgu Iordan の結論は、ルーマニア語とスペイン語は、

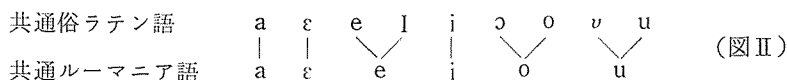
統辞面でも、イタリア語やフランス語にない現象を共有する程類似した点もあるが、音韻面では特に子音に関してはルーマニア語は古形を保ちスペイン語はそれに反し新たな変化をしているという現象を二、三指摘するに止まっている。

さて、Romania の広い版図を見てみると、イベリア半島のスペイン語は西の端で、バルカン半島のルーマニア語は東の端であるから、先程の言語周囲説に立たなくても（尤もこの説は、語彙に関する場合の方が効力がある）差異が認められるのは当然の様であるが、果してどうか、主要な音韻について比較検討してみたい。

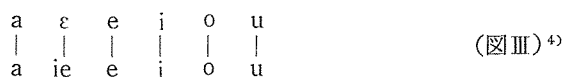
ルーマニア語の母音は、a, e, i, o, u, ă, î (= â) の七つである。前の五つはラテン語にもともとあったものであり、スペイン語でもラテン語から変化は蒙ってはいるが、数は同じく前の五つである。ă と î はルーマニア語特有のもので、しかも両言語に共通する単母音五つは決して同じ過程をたどったのではない。スペイン語の五つの母音の歴史を古典ラテン語の時からみると、



(図 I) の様であるのに対し、ルーマニア語での五つの単母音の生成は、



(図 II) の様であり、前母音は西ロマンス型、つまり、スペイン語と同じ変化をしているが、後母音は最も古い型を保っていると言われるサルデニア型の変化をしている。(図 II) は四世紀頃の想定図であるが、五世紀以後は、ε が ie に変化した為に、



(図 III) に見る様に単母音は五つとなっている。新たな二重母音の生成は、ie はスペイン語と同じであるが、ue (<ɔ>) はルーマニア語ではついにない。ɔ は oa となるがずっと後のことである。だから (図 III) の O にはɔ と O の要素があったと思われる、単母音の数が両言語とも五つという点においては差異はないが、これはロマンス語の音韻体系の特質上、くずれ得ないのである。数は同じでも、たどった過程が異なる事を認識しなければならない

ă と î (= â) は後世ルーマニア語特有の音として生成するのであるが、二つとも軟口蓋音であり、子音の特徴と一諸になって、ルーマニア語の音声特徴は、軟口蓋的となる。又同時に、閉母音が多いという事もルーマニア語の特質である。ルーマニア語の単語の成り立ちは四ないし五音素のものが多く、そのうち古ルーマニア語では、母音の頻度は 48.42 %、現代語では 45.16 %、又、子音の頻度は有聲子音が 30.38 %、無声子音が 24.46 %である。⁵⁾ スペイン語の場合は、⁶⁾ 母音の頻度は 43.49 %、有聲子音が 33.14 %、無声子音が 23.37 %で、西ロマンス語の特徴である

弛緩現象が目につくし、スペイン語の母音は、a が13%を占め e が 11.75 %であるから、ルーマニア語に閉母音が多い特質と対立するし、有声子音の比率が4 %近くスペイン語の方が高い事は、語の音感に軟らかみを与えている。A. Rosetti⁷⁾によれば、西ロマンス語と比較した場合、東ロマンス語の音韻的特徴は次の通りである。

“Le trait caractéristique du groupe oriental des langues romanes, comparé au gallo-roman, est de conserver le squelette consonantique des mots. Dans ce domaine, le roumain et l’italien ont innové seulement lorsque le changement était déjà amorcé en latin :

-b et -v — disparus : *cheie* < *clavem* ; *nca* < *nivem*

tĭ > *ts* : *preț* < *pretium*

dĭ + *o/u* > *ğ* > *j* : *ajuta* (< *ADIUTARE* 筆者)

cĭ > *č* : *urcior* < *urceolus*

k^w > *k* et *p*

g^w > *b* : *limbă* < *lingua*

cs > *ss* déjà en latin vulgaire : *visit vixit* : *usore* : *uxorem*”

この他に東ロマンス語の特徴として、母音間無声子音の保存があげられる。

ルーマニア語のアクセントの位置はおおむね paroxytonique であると言えるが、ラテン語での位置を受け継いでいなくてスペイン語と異なる場合も多い。スペイン語の場合は paroxytonique が約60%で、oxytonique が約40%であり、ラテン語のアクセントの位置をおおむね保っているし、外来語も自らのアクセント様式に一致させている。ルーマニア語のアクセントの位置に関して、Rosetti⁸⁾は、

“În privința accentului, limbile slave meridionale au cunoscut accentul cantitativ și cel muzical, păstrat în sirvo-croată și slovenă, pe cînd bulgara a invocat, dezvoltînd un accent de intensitate (mobil, cu deplasări la vocativ și la plural numelor). În bulgară, accentul e mobil și își schimbă locul.”

と言っているが筆者も同意見で、上述の様に他のロマンス諸語と異り、ラテン語のアクセントの位置を保っていない単語が多いのは、六世紀以降に南スラヴ語特にブルガリア語から受けた影響だと考えている。スペイン語の場合は、隣接するバスク語のアクセントが可動的ではあるがラテン語の力の方が強かったので、バスク語からの影響は少く、従って、アクセントの位置はラテン語の位置を保っているのである。

ルーマニア語のその他の音的特徴は、二重母音・三重母音、時には四重母音の polyphthongue が多いという事である。スペイン語には二重母音までは多いが、三重母音は動詞の活用語尾に現れるのが殆んど例で全体としては少く、四重母音は存在しない。以上、両言語の音韻上の一般的特徴を見て来たが、これだけでも両言語の差異が大きい事が判る。又、フランス語と比較した場合、フランス語は教養語であったのに対し、ダーキアのラテン語は民衆的であり、好対照をな

している。分り良い例をあげれば、二世紀のフランスでは、“chantet” 見る如く t を保存していたが、ダーキアではすでに消失していたのである。スペインのカスティリア語は、西言語のほぼ中間段階にあったと言えそうである。

さて、今までは総括的にスペイン語とルーマニア語の音的特徴を見て来たのであるが、次に母音の主な変化を比較対照し乍ら考察しよう。ここに母音という時は主としてアクセントのある音節の母音を指し、それらを取り扱う。というのは、アクセントのある音節の母音の歴史的変遷は規則的に行われるが、それに反し、アクセントのない音節にある母音の変化には殆んど規則性がないからである。先に図式で概略を示したが、もちろん完全なものではあり得ない。当然、単語を例としてあげるが、その場合、ラテン語から派生して両言語に残っているものに限り、大文字で示す俗ラテン語の想定形（※印は省略する）と対比する。

まず、現代ルーマニア語で a になるのは、A はもちろんの事、両唇音及び軟口蓋子音に先行された E の多くも含まれる。

例：MENZA > *measa > *măasă > masă Sp. mesa, VERA > *veara > *văară > vară Sp. vera, SEPTEM > şapte Sp. siete.

veara は実際に aroumain 方言に現存する形である。E が二重母音化するのはフランス語にも見られるが、oi > wa という変化であり、ルーマニア語のこの変化は独特な現象である。スペイン語では、E > ie は十世紀頃起るのであるが、O. Nandris⁹⁾が、

“La réduction de *ea* à *a* est relativement ancienne, car des mots comme *şapte* < *septem*, *şarpe* < *sērpe*, etc., n’ont pas été sentis comme ayant possédé la diphtongue *ea* et donc, au moment de la réduction de *ea* — *e* à *e* — *e*, ils n’ont pas suivi cette évolution.”

と言っている所から判断すると、早い時期の変化であった事が分るが、N. Drăganu は地名から判断して十三世紀にこの変化は完了したと言う。¹⁰⁾ A はスペイン語の場合と同様に並通は a になるのであるが、環境によって異なる変化をする。つまり、A の次に N 又は N プラス単子音が来る場合、この A は i になる。鼻子音が後続する場合、その母音が閉じるのは音声学的に容易に説明できる事であるが、スペイン語には極めて少い例しかない。

例：LANA > lână lină, Sp. lana; MANU > mână mîna, Sp. mano,¹¹⁾ CANE > câine > ciine, (Sp. canino); ANGELU > inger, Sp. ángel.

NN の場合は例外である。スペイン語では ñ。

例：ANNU > an, Sp. año.

この様に次に鼻子音が来ると、最高の開度を有する母音の A が閉母音の i になるのは、鼻腔へ空気を通す為に口腔を舌でも閉じるから自然と舌尖が上へあがり i の調音点になるのであり、鼻母音を多く有するフランス語やポルトガル語においても原理は同じであり、むしろ、a のままであるスペイン語の方がこの事だけを考えた場合、不自然な様な気もする。更に両言語が異なる結果となる例をあげよう。形態面にも属す問題であるが、イタリア語やルーマニア語では、女性名詞

の複数形はラテン語の第一変化の主格複数形から派生した為、あるいは R. Posner らの説によれば、西ロマンス諸語の場合と同じく複数対格の延長であるがその S が i を経て e になった為だと言うが、いずれにせよ、示複数音である語尾の e に同化して a > e となる例である。MENSÆ は現代語では mese であるが、多分単数の場合と同様 mease という過程があり、a が e に同化したものと考えられる。¹²⁾ というのは、ea という音を表す ě という文字がキリル文字にまじって使われていて、現代語の e にも ea にも同様に ě が使われているからである。そして、この a > e はもう十六世紀には完了していたものと筆者は思う。十六世紀中葉の Voroneţ の写本¹³⁾ に、děci, měrgă という綴りがあるが、現代語では、それぞれ、decî, meargă となっているからである。この様に、基本的母音であるはずの A に関してさえ、両言語間には大きな差異がある。

次に e に移ろう。ルーマニア語の e はスペイン語の場合と同様、大概是 Ē と I に由来する。

例 : CREDO > cred, Sp. creo ; DENSU > des, Sp. denso ; LINGU > lemn, Sp. leño.

しかし、スペイン語とは異なる変化をするものの方が多い。まずはじめに、二重母音 ie の i が先行する子音に吸収される場合がルーマニア語には多い。

例 : Caelu > cer ([tʃer < *tʃier]), Sp. cielo ; ANGELU > inger, Sp. ángel.

スペイン語、特に古カスティリア語には、ie の e が後続する口蓋子音に同化されて、消失する例が多かった。

例 : CASTELLA > castiella > castilla, CULTELLU > cuchillo, etc.

次に、E が語頭にある場合 i 音を添加したのはルーマニア語独特の現象である。

例 : ILLU > el [jel], Sp. el ; EST > este [jeste], Sp. este, etc.

この現象の原因として、スラヴ語の影響をあげる人が多い。Meyer Lübke¹⁴⁾ は、
“il (le roumain) a subi une forte influence slave, même dans son système phonétique *i e* après les consonne y devient *l y e* comme en slave, v. g. flyer (lat. ferrum).”

と言っているし、Rosetti も¹⁵⁾,

“*e* inițial e redat prin diftongul *i e*, deci cu proteza lui *i*; pronunțarea aceasta e normală pentru dialectele de nord ale bulgarei, pe cînd în cele de sud iodizarea lipsește. Faptul e confirmat de albaneză și de neogreacă, în care elementele slave nu cunosc iodizarea la inițială.”

と言い、スラヴ語、特にブルガリア語の影響の強いことを述べている。

更に e に関してスペイン語と異なる例をあげれば、e の次の音節に a, ă, e のうちどれか一つの母音が来れば e は ea になるという事である。

例 : NIGRA > neagră, Sp. negra ; CERA > ceară, Sp. cera.

この変化は e > ee > ea の過程を経たものと思われる。尚、e は唇子音に先行されると ă になった。

例 : VIDEO > văd, Sp. veo.

次に母音の *i* を見よう。*i* がラテン語の *I* に由来するという事は前述の如く、スペイン語の場合と同じである。

例：VINU > vin, Sp. vino; VITA > vită, Sp. vida.

ところが、この *i* の場合も *a* や *e* の場合と同様に、スペイン語の歴史とは異なる例が多い。鼻子音が *E* に後続する時に、*A* が *i* になったと同様、*E* が *i* になる例をまずあげよう。

例：GENERU > ginere, Sp. género; MENTE > minte, Sp. mente.

又、ラテン語の *A* が *i* になってしかも次の音節に *i* がある場合、この二次的 *i* は、*i* になった。

例：ANIMA > înemă > inimă, Sp. alma; ANELLU > inel, Sp. anillo.

更に、*e* > *ă* の時と同じ理由、つまり、軟口蓋子音に先行されると、*i* > *i* の現象が起る。

例：RIPA > ripă, Sp. riba; RIVU > riu, Sp. río

この母音 *i* にしても、スペイン語の場合と異なる例の方が多し事が判る。

今度は *O* に移ろう。*Ō* と *Ö* の区別はダーキアにおいては明確でなかった様である。一様に *o* となるのがルーマニア語の特徴であるのに対して、スペイン語では、*Ō* は *o*, *Ö* は *ue* となるのが規則的である。

例：FOCU > foc, Sp. fuego; PORCO > porc, Sp. puerco.

Ö の二重母音はルーマニア語の文語には普通はないのであるが、口語ではイタリア語と同じ二重母音 *uo* が後世生れた。

例：FOCU > foc > fuoc; PORCO > porc > puorc.

O. Nandris¹⁶⁾によれば、流音が後続する場合の方が頻度は高いという。その理由は、流音が *Ö* を含む音節 (*Ö* と言っても良い)を長くする所から、*ÖÖ* > *uo* となったものである。Rosetti¹⁷⁾は、“Tratamentul lui *o* slave meridional, în romină, se explică prin faptul că *o* era foarte deschis.”

と言っているが、これはスラヴ語と同様、現代ルーマニア語でもアクセントのない *o* は *a* に近い事と関係があるし、更に、二重母音がスペイン語の様に *ue* でなく *uo* である事にも関係する。ルーマニア語の最初の文献は十六世紀を待たねばならないが、その十六世紀の Voroneţ の写本にはすでに二重母音は見られるが、スペインでの初出年代は M. Pidal¹⁸⁾によれば、レオン方言では *uo* 及び *ua* の両形が十一世紀、*ue* の形がオビエドで十世紀中葉、カスティリアやアラゴンでも十世紀中葉から *ue* の形が多いという。

例：HOMINE > uemne, uamne, mod. Sp. hombre, Rum. om (<HOMO).

いずれにせよ、スペインでは十、十一世紀の初期の段階では、*O* の二重母音の形として、*uo*, *ua*, *ue*, *oa*, *oe* などの異形があったのが、そのうち、*uo*, *ua*, *ue* の三形が種々の方言で優勢となり共存さえしていたのであるが、カスティリアでの優勢形である *ue* がその政治的力とあいまって、広まったのである。そういう意味では、この *O* の二重母音化はルーマニア語・スペイン語双方に共通な点もある様に見えるかも知れないが、前述の如く、スペイン語では文語でも起る現象で

あるのに対し、ルーマニア語の文語では起らず、口語でも限られた環境でしか起らないという根本的な差異がある。その他の大きな相異は、スペイン語では *o* は語頭にも語中にも語尾にも高い頻度で来るのに対し、ルーマニア語では語尾に来る例は極めて少い。

例：OCLU > ochi, Sp. ojo; OCTO > opt, Sp. ocho; FOCU > foc, Sp. fuego.

最初と最後の例の語尾の *U* はルーマニア語では全く消失し、スペイン語では *o* になって保存されている。又、*N* が *O* に後続する場合は、*E* に *N* が後続する場合に *E* が *i* に変化したのと同じく、*O* は *u* に変化する。

例：BONU > bun, Sp. bueno; PONO > pun, Sp. pongo.

O の場合も両言語の差異の方が質的に大きい。

さて、*u* の場合はどうであろうか。ラテン語の $\bar{U}$ と *U* はルーマニア語では共に *u* になるがスペイン語では *U* は *o* となり $\bar{U}$ のみが *u* になる。*N* が *O* に後続する場合、ルーマニア語では *O* が一段階閉じて *u* になるが、これはスペイン語にはない現象である事はすでに述べた。いずれも質的に大きく異なる変化である。

これら五つの共通する母音の他にルーマニア語には $\check{a}$ と $\check{i}$ がある。Nandris¹⁹⁾ によれば、
“*i* est une voyelle fermée, vélaire, articulée sans arrondissement des lèvres (une sorte de *u* plus fermée, delabialisé). On le compare communément à l’*i* turc ou à l’*bi* russe.”

という。この音についてダーキア語の基層の響影があるのかスラヴ語の影響があるのか、定説はない。ルーマニア語で $\check{i}$ になるのは、前にも触れたが、

1. 鼻子音が後続する場合の *A*, 例：LANA > lina, Sp. lana;
2. 軟口蓋子音に先行された *I*, 例：RIPA > ripa, Sp. riba.

の二つが主な例である。

以上、単母音について、一致点・不一致点を見て来た。重母音は、例えば *E* > *ie* の如く、ローマ帝国の分裂以前の俗ラテン語の段階ですでに発生していた極めて少数の例を除いて、一致するものは殆んどない。スペイン語の二重母音の数は、*ai, oi, ei, au, ou, eu, ia, io, ie, ua, uo, ue, ui, iu* の十四種類であるのに対して、ルーマニア語は、*ie, ei, ou, ău, iu, iă, uă, uo, ia, io, iu, ea, eo, eu, ai, au, oi, oa, ui, ua, ăi, ii, ia* の二十三にものぼり、その起源・経過はスペイン語の場合と異り実に複雑多岐である。

スペイン語の方言を調べてみると、音韻組織について言えば、カスティリア語を標準とした場合、gallego-portugués は母音的であり、カタロニア語は子音的であると Entwistle²⁰⁾ は言っている。その様な差がスペインの各方言間に見られるとしても、ルーマニア語と対比してみたらどうであろうか。古ルーマニア語では子音は 51.58%，現代ルーマニア語では 54.84% を占めるという²¹⁾ から、ルーマニア語も、カタロニア語と同様、子音的と言えそうだ。

まず *p* を見よう。現代ルーマニア語の *p* になるラテン語の音は大抵 *P* と *PP* であるが、内破音の *K* も一員として加わる。語頭やある子音に続く *P* はスペイン語も同様 *p* であるが、母音間

の P はスペイン語では摩擦化が進み b になるのに対して、ルーマニア語では p のままである。これは東ロマンス語の特質でもある。両言語が異なる第二の点は、ルーマニア語では内破音の P が保存されるのに対して、スペイン語では、この場合も、摩擦の結果消失するという事である。

例：SEPTEM > șapte, Sp. siete; SEPTIMANA > săptămîna, So. semana.

第三点は、CS と CT の組み合わせでは、ルーマニア語の場合 C [k] が、調音点が共に前である S と T に引かれて、p になるものが多いが、スペイン語の場合は [k] が yod と化し、その yod が S と T に影響を与えて、それぞれ š と ê になるのである。スペイン語のこの yod の生成にしても摩擦の結果である。

例：COXA > coapsă, mod. Sp. coja; FACTU > fapt, Sp. hecho; LACTE > lapte, Sp. leche; LUCTA > luptă, Sp. lucha.

この様にスペイン語の場合もルーマニア語の場合も CS の [k] が保たれている例がないのは、次に来る子音が破裂音である CT の場合と違って、より聴えの度合いの高い音節頭位の狭窄音の S が後続する為に、本来は破裂音であったが音節尾位という位置により極端に摩擦化した C が自立性を失って、CS > *ss > s の如く s に同化した為である。スペイン語では²²⁾、TAXU > Old Sp. texo, mod. Sp. tejo; MAXELLA > Old Sp. mexiella, Mod. Sp. mejilla; DIXISTI > dijiste; EXEMPLU > ejemplo などの如く、x [š] > j [x] になっている。筆者はスペイン語の CS > š は十世紀頃、CT > ê は十一世紀頃と考えている。²³⁾ O. Nandris²⁴⁾ は、この C の mutation の現象をダーキアのラテン語 (latin carpatho-danubien) に特有なものでスラヴ語の影響はなく、三世紀から六世紀の間に起ったとしている。後続する子音に同化されて調音部位が前に移動しつつも、[k] という閉鎖音を p 音でかろうじて保っているとも言える。この様な事に鑑みて、Nandris²⁵⁾ は、

“...à la lénition des consonnes intervocaliques et à l'allègement des groupes consonantiques, le dacoroman oppose la tendance à la stabilité des premières et à la conservation des seconds... Parmi les tendances de base imprimées à la nouvelle langue, l'une des plus caractéristique est la solidité du consonantisme et les traitements *cs* > *ps*, *ct* > *pt* en sont une conséquence.”

と言っている。スペイン語との差が明らかである。p に関して異なる第四点は、ラテン語の QU がルーマニア語では p になるのに対し、スペイン語では例によって語中では gu と有声化する事である。

例：AQUA > apă, Sp. agua; EQUA > iapă, Sp. yegua; (cf. QUATTUOR > patru, Sp. cuatro)

GU もルーマニア語では b になるのに対してスペイン語では g (u) を保っている。

例：LINGUA > limbă, Sp. lengua; INTERGUARE > întreba, Sp. interrogar (< INTERROGARE)

Nandris は、ダニューブ川の南の三つの方言でも同じ音韻変化である所から、protoroumain 時期の変化と見ている。

Iorgu Iordan と María Manoliu ²⁶⁾ は

“a partir del siglo III el latín vulgar manifiesta una tendencia a diferenciarse en cada provincia con respecto a las otras.”

と言っているが、イベリア半島のラテン語では、特にメリダの碑文には、imudavit の如く母音間無声子音 P, T, K が一様に有声化する傾向があり、西ゴート時代の七世紀にはその傾向がいちちるしくなり、殆んど完全に摩擦化した。西ロマンス語の特徴である馳緩の結果である。この現象は弱い母音 (vocal postónica interna) の消失以前であり、この母音の消失は Appendix Probi にも見られるが、二世紀が初出である。又、当然の事ながら、ラテン語の母音間 B, V も同じ道をたどり摩擦化したし、その程度の高い場合は消失する結果となった。消失する例はルーマニア語に多い。

例 : CABALLU > cal, Sp. caballo ; CANTABAT > cinta, Sp. cantaba.

Nandris ²⁷⁾ は、

“B intervocalique subit à l’époque du proto-roum. une assimilation d’aperture et disparaît ... La lénition a commencé en latin vulgaire et des graphies l’attestent dès le I^{er} siècle.”

と言っているが、ルーマニア語の方がスペイン語より摩擦化が進んでいるのはめずらしい例である。尚、B は語頭位と子音に後続する語中の場合は両言語で保存されている。

F はルーマニア語では殆んどの位置で保たれている。語頭の例をあげると、

例 : FERRU > fier, Sp. hierro ; FOCU > foc, Sp. fuego ; FLORE > floare, Sp. flor.

これらの少しの例でも判る通りスペイン語では一寸複雑である。十五世紀頃までの文語では今日のポルトガル語やタロニア語同様、カスティリア語でも f は保たれていたが十六世紀を通じて h の文字に代られ、当然発音も当初は氣息音に代った。この理由として、バスク語の基層的影響が十六世紀に現れたとする説や、アラビア語に多い強い喉音の影響に寄るとする説が対立しているところに、更に、自然の馳緩現象であるという説もある。筆者は馳緩現象だと考える。この h は十六世紀後半には無音になり今日に至っている。方言によっては、例えば、Santander, Asturias, Salamanca, Extremadura, Andalucía などでは、十五世紀当時の氣息音が残っていて j の文字で書き表わされている。実は、F は ue と ie の二重母音の前では大抵保たれているのである。筆者が F > h を馳緩現象であるとする根拠の一つはここにある。つまり、ue や ie の二重母音は、馳緩の反対の強調の結果生成した音であるから、それに隣接する F が馳緩するはずがないからである。

例 : FONTE > fuente ; FOCU > fuego ; FERU > fiero.

M. Pidal ²⁸⁾ は、十一世紀頃から氣息化した例あるいは無音化の例がバスク地方に近い Burgos, Rioja, Alto Aragón にある事を根拠に、バスク語の影響説を唱えている。

T は、頭位では、両言語とも保っている。

例：TAURU > taur, Sp. toro; TIMEO > tem, Sp. temo.

語中、子音の後（音節頭位）での T も保存される。

例：HOSTE > oaste, Sp. hueste; PORTA > poartă, Sp. puerta.

母音間では、ルーマニア語では T をおおむね保存するが、スペイン語では P や K の場合と同様有声化する。

例：VITA > vida, Rum. viață; ROTA > rueda, Rum. roată.

スペイン語では動詞の二人称複数の活用語尾—TIS の T は母音間であり、摩擦の度合いが高くて消失するし、同様に第一変化の動詞の過去分詞—ado の d も同じ理由で消失する。アクセントのある次の音節に現れる yod (postónica) の前では T は両言語とも歯擦音になる。スペイン語は、ルーマニア語の場合よりも進んだ。

例：NEGOTIU > negoț, Sp. negocio; PRETIU > preț, Sp. precio.

この変化は yod への同化の結果でもあり、ロマンス諸語に共通した俗ラテン語時代からの現象である。

例：PUTEU > Rum. puț, Prov. potz, Fr. puits, It. pozzo, Sp. pozo, Ptg. poço; PRETIU > Prov. pretz, Ptg. preço. It. prezzo.

Nandris²⁹⁾によれば、ダーキアの俗ラテン語の碑文にこの歯擦音化が現われるのは二世紀の事らしい。

ルーマニア語の d は大抵ラテン語の D 及び DD から派生している。スペイン語の d は母音間 T からも派生する事はすでに述べた。D は語頭、及び語中でも子音に後続する場合は保存されている様だ。

例：DENTE > dinte, Sp. diente; DIGIDU > deget, Sp. dedo; CHORDA > coardă, Sp. cuerda; CALIDA > cald, Sp. caldo.

しかし、前述の如く、母音間 D の場合は、ルーマニア語では保存されるのに対して、スペイン語では消失するという傾向がある点が異なる。

例：VIDEO > văd, Sp. veo; CODA > coadă, Sp. cola.

この母音間 D の消失の現象は古スペイン語の方がいちぢるしかった。

例：SUDARE → suor (Berceo) > sudor, Rum. asuda; CRUDO > crúo (Berceo) > crudo, Rum. crud.

しかし、これらの古形の例は、スペイン語らしい音形特徴を示さないで、現代語では -d- が復活したのである。しかし古形を保っている例も多い。

例：AUDIRE > odir > oír, Rum. auzi; RADICE > raíz, Rum. rădăcină; FRIDU > frío, Rum. frig.

これらの例のうち、ルーマニア語の auzi で D が z に変っているのは yod の影響を受けて歯擦

化したもので、まだ保存されていると考えられるし、frig の g は、過去分詞が -s で終る動詞の語幹が g で終るものが多い為の類推の結果である。これも同様に保存の部類に属する。語尾の -D はスペイン語では殆んど消失するのであるが、ルーマニア語ではスペイン語程ではない。

例：AD > a, Sp. a; QUID > ce, Sp. qué; QUOD > că, Sp. que.

上の例の様にラテン語の一次的 -D は消失し、語尾母音消失の結果の二次的な -d はルーマニア語では保存されている。スペイン語では ciudad の -d は *θ* 又はゼロである。

例：CRUDU > crud, Sp. crudo; MODU > Mod, Sp. modo.

だから、この語尾の -d に関しても両言語は異なるという事になる。無声の T の場合と同じく、後続する yod に影響されて歯擦化する現象は共にある。しかし、その様な変化は、スペイン語では語頭位で少いのに対して、ルーマニア語では多い。

例：DIANA > zină, Sp. diana; DICERE > zece, Sp. decir; DECEM > zece, Sp. diez;
ADIUTARE > ajuta, Sp. ayudar.

複数形で -D + I > zi になるのもルーマニア語の特徴である。語中では、アクセントのある音節の次の音節頭位に限るのだが、両言語とも、破擦音を経て摩擦音になり、その結果、ルーマニア語では *ž* > z であり、スペイン語では *ž* > y である。

例：RADIA > rază, Sp. rayo; AUDIO > auz, Sp. oigo.³⁰⁾

又、ルーマニア語には語中の音節尾位で D > r の変化があるが、実はこれは俗ラテン語の時代にすでに起った現象であり、共に摩擦音であるという共通点を有す為である。

例：ADMISSARIU > armessariu > armăsar, (Sp. corcel); ADVOCATU > arvocat, Sp. abogado.

いずれも音節尾で自立性のない条件である。同じくスペイン語にも音節尾(語尾)の -d が -r と似ている為に、二人称複数命令形の活用語尾 -d が不定詞の尾部 -r と混同され、不定詞が命令形の代用をするという事が popularismo では行われている。

s の調音点についてはヨーロッパの諸言語内でも多くの差異があるが、ルーマニア語の s を Nandris³¹⁾ は、

“C’est une constrictive, interdental, sourde, articulée avec la pointe de la langue en bas.”

と説明している。フランス語の s に似た調音である。一方、スペイン語の s は、M. Pidal³²⁾ によれば、

“S castellana es cóncova apical alveolar; el ápice de la lengua, vuelto hacia arriba, forma una estrechez contra los alvéolos de los incisivos superiores ... bien pudiera llamarse prepalatal.”

であるから、互に少し異なる。しかし、共にラテン語の S 又は X [ks] から派生しているのであるが、X が s に代られた例は Appendix Probi にあるから、古い。まず語頭の場合は、SOLE > soare, Sp. sol. の例で判る通り、スペイン語では S に母音が後続する場合はそのままであるが、

impure S の場合、その前に e を添加する慣習である。

例：SCRIBO > scriu, Sp. escribo；STARE > sta, Sp. estar.

これは、スペイン語の s の特徴である高い調音点に由来する³³⁾。この s の両言語の差は語尾においても現れる。前にも触れたが、スペイン語をはじめとして西ロマンス諸語では複数の印として s は保存されているのに対して、イタリア語やルーマニア語では消失しているのである。尚、ポルトガル語の -S の発音は [ʃ] に近い。C. Battisti³⁴⁾ は、

“Al tempo di Cesare pare che -s fosse parzialmente ripristinato, ma dopo la metà del secolo secondo -s scompare comunemente dalle iscrizioni e il dileguo si intensifica nelle iscrizioni dell’ Italia centrale, dove comincia ad essere soppresso s anche nell’ accusativo del plur. . . .”

と言っている。この様に東ロマニアにおいても複数の場合も対格から派生しているという説に賛同する人も多く、R. Posner もその一人であるが、H. Rausberg³⁵⁾ は、

“La característica principal de la Romania oriental consiste en el cambio de la -s latina en -i.”

と言っている。だからこの -S の差異は明白である。又、スペイン語では intervocalic simple s は有声であったが、中世後期に ss 同様無声化した事も大きな差異の一つである。更に、yod が後続する場合は、ルーマニア語では s は口蓋化したか、スペイン語の s はすでに口蓋音である為であろう、変化しない。男性名詞の plural marker である i が s に後続する場合もルーマニア語では例外なく ș となる。

L は、語頭では、yod もしくは i palatalisant が後続しない限り両言語で等しく保たれる。その他の多くの場合、両言語の差は大きい。第一に、ルーマニア語では、語中で yod に後続される L 及び LL は共に初期に湿音化し（スペイン語もこの段階までは同じ）、現代語では消失している。現代スペイン語では、別の音に質的に変っているものもあるが消失はしていない。

例：FOLIA > foaie, Sp. hoja, GALLINA > găină, Sp. gallina.

第二に、-LL- は、無アクセントの a が後続する場合は消失し、それ以外の母音が後続する場合は l (simple) に変っている。スペイン語は、環境に左右されず一様に [ʎ] の音である。

例：STELLA > stea, Sp. estrella；CABALLU > cal, Sp. caballo；CALLE > cale, Sp. calle；
VALLE > vale, Sp. valle.

第三に、ルーマニア語の rhotacisme は見のがせない。第一の点と関連があるが、i palatalisant 以外の母音が -L-, -LL- に後続する時、これらの子音は -r- に変る現象である。この変化はカスティリア語にはないが、その周辺の方言には多い。

例：SOLE > soare, Sp. sol；CAELU > cer, Sp. cielo；DOLU > dor, Sp. duelo.

だから、カスティリア語を除いたスペインの諸方言やルーマニア語の方が自然な変化なのかも知れない。実は、この変化はとても古く、Appendix Probi 以前のものである。だから、ダニューヴ川以南の方言にも見られるのは当然である。カスティリア語は十世紀頃の cultismo の延長か

も知れない。この rhotacisme の起る過程を Nandris³⁶⁾ は、

“La transformation de *l* en *r* s’explique par un affaiblissement progressif du contact apicoalvéolaire requis pour *l* : au lieu d’un écoulement uniquement latéral de l’air il s’en produit également un apical ; l’*l* fricatif qui en résulte est identifié ensuite avec *r*.”

と言い、その年代の早い事に言及して、

“L’évolution de *l* intervocalique à *r* a l’époque du protoroumain, car les trois dialectes sud-danubiens la connaissant : le phénomène n’a pas lieu dans les mots d’emprunt, il est donc antérieur à l’influence slave en roumain.”

と言っている。実は、この現象は語尾もしくは語中に多く、特に語尾（つまり、音節尾）に多いのは、*l* と *r* の中和化が行われ得る条件が良いという原因による。因に、*R* > *l* の変化は、ultra-corrección や metátesis その他特殊な場合をのぞいては systematic な変化はない。rhotacisme の別の例をあげると、*N* が *r* になる事がルーマニア語には多かった。日本語にも、群 *gun* > *guru* の例はあるが systematic ではない。ルーマニア語では *L* > *r* の場合同様、ラテン系の単語で、しかも、母音間に限られる様であるから、スラヴ語との関係はなさそうだ。

例 : *I UNA* > *lură*, Sp. *luna* ; *BENE* > *bire*, Sp. *bien* ; *BONU* > *buru*, Sp. *bueno*.

ところが、この *N* > *r* の現象は十七世紀頃までで、以後 *cultismo* を採用したから、現代語ではそれぞれ、*lună*, *bine*, *bun* となっている。

最後に、ラテン語には無かった子音の代表として *ê* について比較してみよう。この音も両言語に有るという点では共通しているが、お互の派生経路は異なる。ルーマニア語の場合は、

- (a) 前母音によって口蓋化された軟口蓋音、つまり、文字で言えば、*c*, *qu*, *ch* ;
- (b) *yod* に後続された *t* 及び *c* ;
- (c) 外国語からの借用語。

の三種類に分類できるが、勿論(c)は(a), (b)の素地が出来上った後の事である。

例 : *CINQUE* > *cinci* > Sp. *cinco* ; *CERA* > *ceară*, Sp. *cera* ; *VICINU* > *vecin*, Sp. *vecino* ;
TATITIONE > *tăciune*, Sp. *tizón*.

これらの例で判る通り、スペイン語では *ts* > *θ* と口腔の前へ進み、ルーマニア語の場合は *ts* から口腔の後へ進んで口蓋化したのである。このルーマニア語の現象は六世紀には完了していたと見る向きが多い。スペイン語の *ê* の発生は筆者は十一世紀前半以前であると考えている³⁷⁾。スペイン語の場合は -CT- という連鎖の [*k*] が *yod* と化し *T* がその *yod* の影響を受けて口蓋化し、しかも、ルーマニア語の(b)の場合と異り、アクセントのある音節の次の音節で起る現象であるから、同じ *ê* でも根本的には異なる過程であると言えよう。

例 : *NOCTE* > *noche*, Rum. *nopte* ; *LACTE* > *leche*, Rum. *lapte*.

ルーマニア語では、[*k*] という閉鎖音は *T* に引かれて前に出て両唇音となったものの閉鎖的特徴は保っている。スペインの各方言では、-CT- の [*k*] は *yod* のままの古形を保っているから、

rhotacisme の場合と異って、今度は、ルーマニア語とスペインの各方言間にも類似性はないことになる。

紙幅の都合で、これ以上音について考察できないが、今まで扱って来た子音についても、両言語の差異が特にいちぢるしいものを故意に選んだつもりはない。

次に、少し視点を変えて見てみよう。基層語となる可能性のあるものとして、ルーマニア語の場合、イリリア語とトラキア語がある。トラキア語の *καρπάτης* (岩) にカルパチア山脈の名称が由来する如く、地名が多いのであるが、起源を示す *-esc* という尾接辞が *București* などの地名に残っている事、あるいは、*a vorbi românește* などの副詞的表現に残っている事を考えると、影響は少なかった事は判るが、音韻面については定説はない。Rosetti³⁸⁾ は、バルカン半島の言語的統一、特に音韻について、*ă* はアルバニア語(*ë*) ブルガリア語(*ъ*) にも見られるが、スラヴ語起源の単語には見られず、*-N- > -r-* の rhotacisme 及び CT と CS の labialisation (唇音化) はアルバニア語と共通するが、labialisation はギリシャ語の方言、古マケドニア語並びに南イタリアにも見られる、と言い、バルカン半島の諸言語間の共通性を強張している。実は、上の共通性の外に六世紀以降のスラヴ族との混住による二言語併用の結果である新たな現象がある。各音について考察した際にも触れた事柄もあるが、それ以外の現象を追加し乍ら、ルーマニア語の音韻に関して、ここでまとめてみると³⁹⁾、

- 1) 前母音の影響による子音の口蓋化が、ルーマニア語の方がスペイン語より多いのは、スラヴの影響である。勿論全てではない。
- 2) スラヴ諸語では、*ě, e, ĭ, i* はヨッド化 (yodisation) するが、それが *el [iel]* となる原因である。特にブルガリア語の影響と考えられる。
- 3) *h* (spirante vélaire) や *j* はラテン語にはないが、教会スラヴ語の影響で、現代ルーマニア語にあるのである。教会スラヴ語の直接の子孫はブルガリア語である所から、ブルガリア語の影響と考えられる。尚、現代スペイン語には共にはない音である。
- 4) 南スラヴ語、特にブルガリア語からの借用語はもとのアクセントの位置を保っていて、スペイン語の場合の様に同化しない。
- 5) *yer* 音 (*ŷ, ĭ*)⁴⁰⁾ は無アクセントの時は消失する。アクセントのある場合は、ブルガリア語でも十世紀以降母音化し、ルーマニア語でも借用語では母音化した。
- 6) *or, ol* は南スラヴ語では八世紀末以降 *metátesis* を起すが、借用語ではルーマニア語でも同様である。
- 7) *rŭ, lŭ, ri, li, ŝt, žd* はルーマニア語とブルガリア語は同じ変化をする。

さて、H. Rausberg⁴¹⁾ は、

“el latin no era una lengua uniforme ni en el aspecto social, ni en el cronológico, ni en el geográfico.”

と言っているが筆者も同意見である。いかにローマやガリアの文化的水準が高く、ローマニア

内部互に往来があり均一化への傾向が認められるとは言え、共通俗ラテン語という実体はあり得ないと考える。それに、スペインのローマ化は紀元前三世紀に始ったのに対し、ダーキアのローマ化は紀元後百年以降の事であり、その間四百年以上の差がある。四百年という年月は言語の変遷にとって実に長い。同一地域においても四百年もたてば、自然に言語はその様相を変える。

M. Sanchis Guarner¹²⁾は、

“totes les innovaciones lingüistique partien de Roma.”

と言っているが、もしそうだとすれば、周圀説は別にしても、イベリア半島のラテン語とダーキアのラテン語に差異があるのは当然である。Quintilianus は自分の生涯を通じてラテン語がめざましく変遷した事を伝えているが、今日の様に均等化の傾向が強い情報化社会の四百年と、各プロウキンキアの地方的特徴が強く発揮され得た時代の四百年とでは、同じ四百年でも言語の変遷にとっては実質上大きく異り、古えの四百年は実に長い四百年であったと思われる。中世を通じても事態は変わらず紀元後四世紀の聖ジェロニムスも自分の生涯のうちに言語が大きく変った事を述べている。

西ローマニアでは文化の中心地は、紀元前一世紀のガルリアのローマ化以来、ガルリアに移るが、イベリア半島ではそれ以前から、主として貴族の子弟達の為の高等教育の学校が開設されるなどして文化的水準は決して低くなかった。尤も、ローマ化の経路に、南の Baetica と東の Tarraconensis の二大中心地があり、南は華やかな貴族的文化の中心であり商都であるのに対し、東の方は軍団の駐屯するいわば低俗な文化の場であり、その為に南の方では言語も保守的であり、東の方は革新的であると H. Meier が言っている如く、イベリア半島の言語状態も決して一様でなかったのであるが、ダーキアの場合は、帝国のいたる所から (ex toto orbe romano) あらゆる階級の移住民が集まって来たが、多くは文化的水準の低い退役兵であるからして、この事だけを考えて見ても、元々変化が容易に起り得る素地があったと言わねばならない。その Dacia felix は 267 年ローマの手から離れはじめ、275 年にはゴート族に対する名目上の地理的国境でしかなくなるのであるが、ダーキアを放棄した文化面でも指導者であるところの政府の高官達はローマに帰り、その結果、低かった文化水準が尚更低くなり、言語の改変の余地が以前にも増して大きくなり、Gotalania と呼ばれる程にまでゴート族との混住が進み、スラヴ族の侵入する六世紀をむかえるのである。スペイン語の場合と同様、ゴート語の影響は、音韻面に関する限り無いとは言えるものの、ゴート族がキリスト教導入のきっかけをつくったという点は見のがせない。ローマの支配は短かったから、ラテンの信仰は根強くなかったし、ダーキアの地に多かったのは職人や商人の植民者であり、その上、キリスト教発祥の地に近かった事などもあいまって、抵抗が少くキリスト教が受け入れられた。その導入の時代が早かった事が今日ルーマニア語がロマンス語の一員である大きな理由のうちの一つなのである。もちろんそれが唯一の理由ではないが、もしキリスト教の導入がもう少し遅かったならば、キリスト教用語はもちろんの事、日常の言語はギリシャ語かスラヴ語になっていたであろうと思われる。スペインでも西ゴート王朝の時代に国教

をカトリックと決めた為に、ルーマニア以前にローマの文化はすでに根深く侵透していたのであるが、尚更、ローマの文化と融合し、ラテン語が定着した。他のロマンス諸語も同様であるが、両言語はキリスト教という目に見えない糸によって結ばれていたものであり、これがロマンス諸語に見られる均等性に関する言語の体系外の (extra-linguistic) 主な理由の一つである。言語自らに関する主な理由としては、ラテン語という同一言語から派生した諸言語は、元々多岐に分裂し得ない音韻的要素で成り立っているからであり、又、いかなる言語を見ても分る通り、口腔の構造には限りがあり発音可能な音韻数にも限度があるからである。その分裂し得ない最少限度の構成要素は、各言語が必ず有している経済的要素であるから、その部分が不変あるいは不変に近い事は当然である。たとえ変化しても変化の種類は多くなり得ないから、均等に見えるのである。例えば、基本母音は元のラテン語では五つであり、ロマンス諸語でも大抵五つである事は、この良い例である。ラテン語には、更に、長短の区別があった事、フランス語やポルトガル語で後に鼻母音が生成し、ルーマニア語では閉母音が多い事、あるいは、同じ O から派生した二重母音でもスペイン標準語では ue であり、ルーマニア語では oa, イタリア語では uo である事などは、可変の部分に属す。この互の可変的部分が、多様性の原因となる。この多様性を呈す原因は序文でも触れた様に多いし、当然、個々の言語の体系外の要素が入ってくる。筆者は、各言語の様相、輪郭を決める要素は決して単一ではあり得ないと考えている。だから、M. Bartoli の言う、スペイン語とルーマニア語は共にローマニアの両端にある言語だから類似性が強いという説には賛同できないし、筆者が示した例でも判る通り、事實は、両言語間に類似性は当然存在するが、決して強くはなく不一致点の方が多いのである。言語変化の要因を説く多くの説のうち、言語の年令を云々する説があるが、これはある程度筆者は賛同できる。しかし言語の年令を云々する場合、

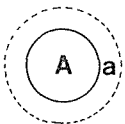


図 IV



図 V



図 VI

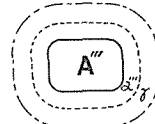


図 VII

やはり言語外の要因 (extralinguistic factors) をも考慮して議論しなければいけない。言語それ自身では年とはとれない。図IVはラテン語の抽象図である。図Vは例えばスペイン語、図VIはルーマニア語、図VIIを何か別のロマンス語の一つとしよう。A は不変・本質的部分であり、A' も A'' も A''' も、たとえ変形していても、“体積”は A と同じである。“体積”と取えていうのは、言語が立体的有機体であるからである。a, a', a'', a''' は可変的部分であり、言語によって“容積”は異なる。α, β, γ は extra-linguistic factors である。もちろん“容積”は一定ではない。これら三者が一体となって“年をとり”，異なる様相を呈するのである。だから、この言語外の要因を明確にする必要がある。紙幅に制限があったので本稿では両言語のたどって来た歴史上の条件をいまいち明らかにできなかったが、両言語の背景が決して一様でなかった事は周知の通りである。

さて、ルーマニア語とスペイン語の間の多様性あるいは不一致性については、音韻面に限って言えばスペイン語は外的要因からの影響が少く殆んど言語の（音韻）体系内の自らの変化で変身したのに対し、ルーマニア語は南スラヴ語、特にブルガリア語という外的条件に左右された点が多かった事、及び、ローマ化（ラテン語化）の程度がスペインでは強かった為に変化は少く、ダーキアでは弱かった為に変化が容易であったという少くとも二つの事柄があげられる。だから、M. Bartoli の言う様に、共に周辺の言語であるから類似しているとは言えない。均等性の存在する原因として、ラテン語という共通の祖先に由来する両言語には、いかなる言語にとっても本質的不変の部分が共通してある如く、スペイン語にもルーマニア語にも、その不変の部分が残っている為であり、同時に、キリスト教の統一力が、間接的且つ言語外の要因としてではあれ、極めて大きかったからだと結論できよう。（'74. 7, 31. V）

（注）

- 1) La fragmentación lingüística de la Romania, Madrid, 1971.
- 2) Montevideo, 1964.
- 3) 共通俗ラテン語という概念は語彙の面では殆んど不可能な概念であるが、音韻面ではどうだろうか。筆者は、Romania という広範な平面に同一時期に、共通俗ラテン語が存在したとは考えない。A. Rosetti は *Brève histoire de la langue roumaine des origines à nos jours*, pag. 24, (Mouton 1973) で、*“L'unité, au moins théorique, du latin vulgaire ne s'applique pas au lexique, qui n'a jamais été unifié dans l'“Orbis latinus”.*” と言っている。この母音図に関しては、概略を示すだけなのであまり問題はないと思って、慣例に従いここに引用した。（注41）を参照。
- 4) この想定図は、Elcock, *The Romance Languages*, London, 1969; Rosetti, *Ibid.* による。
- 5) Octave Nandris, *Phonétique historique du roumain*, Paris, 1963, pag. 4.
- 6) N. Tomás, *Studies in Spanish Phonology*, Univ. of Miami Press, 1968, pag. 25.
- 7) *Brève histoire.*, pag. 26.
- 8) *Istoria limbii române*, Bucureşti, 1964, vol. III, pag. 87.
- 9) *Phonétique historique du roumain*, Paris, 1963. pag. 77.
- 10) O. Nandris, *Phonétique historique.*, pag. 78.
- 11) â と î は正書法上の差で音価は同一。â は România 及びその派生語にしか使われない。
- 12) mese は masă の複数形である。
- 13) *Introduction a la morphologie comparée des langues romanes*, Belgique, 1962, tome VI ancien roumain pag., 45.
- 14) *Grammaire des Langues Romanes*, Paris, 1890, tome I pag. 11.
- 15) *Istoria Limbii Române*, Bucureşti, 1964, vol. III pag. 88.
- 16) *Phonétique historique.* pag. 69.
- 17) *Istoria limbii române*, vol. III pag. 91.
- 18) *Orígenes del Español*, Madrid, 1968, pag. 110—143.
- 19) *Phonétique historique.*, pag. 53.
- 20) *Las lenguas de España*. Madrid, 1969, pag. 27.
- 21) *Phonétique historique.*, pag. 105 の Dimitrie Macrea の引用による。
- 22) Menéndez Pidal, *Manual de Gramática Histórica Española*, pag. 144.
- 23) “口蓋子音の生成についての考察”, *Estudios Hispánicos* 3号, 大阪外大西語研究室。

- 24) *Phonétique historique.*, pag. 259.
- 25) *Id. Ibid.*
- 26) *Manual de lingüística románica.* Madrid, 1972, vol. I pag. 67.
- 27) *Phonétique historique.*, pag. 111.
- 28) *Manual.*, pag. 122.
- 29) *Phonétique historique.*, pag. 236.
- 30) スペイン語の oigo の発音は、古くは [o y o] だと考える。cf. 拙論, “不規則動詞の不規則ということ” *Estudios Hispánicos* 4号, 大阪外国語大学西語研究室。
- 31) *Phonétique historique.*, pag. 130.
- 32) *Manual.*, pag. 103.
- 33) impure s はイタリア語でも定冠詞をつける時の扱いが異なるから、幾分意識はあったものと思われる。尚、音節との関係については拙論 “イスパニア語の音節構造と分綴法” 大阪外大学報30号, 参照。
- 34) *Avviamento allo studio del latino volgare.* Bari 1949, pag. 138.
- 35) *Lingüística Románica.* Madrid, 1970, vol. I pag. 97.
- 36) *Phonétique historique.*, pag. 257 et 258.
- 37) “口蓋子音の生成についての考察”, *Estudios Hispánicos* 3号。
- 38) *Brève histoire.*, pag. 56.
- 39) Rosetti, *Brève histoire.* pag. 69 によるところが多い。
- 40) Rosetti, *Istoria limbii romine.* vol. III pag. 93, ũ (ier tare) și î (ier moale) sint vocale ultra-scurte.
- 41) *Lingüística Románica.* vol. I pag. 95. (注3) を参照。
- 42) Kurt Baldinger, *La formación de los dominios lingüísticos en la Península Ibérica.* Madrid, 1972, pag. 110 の引用による。